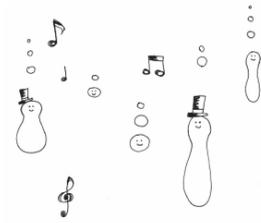


絶対音感の考察

「絶対音感」という言葉を聞いたことがお有りでしょうか。
鍵盤上の音を弾くと、どの音が鳴ったのかが判別出来る、という能力です。
絶対音感をお持ちの方は、それぞれの個別の音名が独立して聴こえます。



絶対音感と対比して使われているのは、「相対音感」です。

相対音感をお持ちの方は、その名前の通り個別の音としてではなく、相対的に音の高さを感知するのです。

普通、小学校などで楽譜を読む時に使われるのは、この「相対音感」です。
メロディーを音名で読む時には、必ずその調の主音を、「ド」と読むのです。

そして、「絶対音感」は、子供の時から音感の訓練を受けることで習得する場合がありますが、どれだけ正確に音をインプットしたとしても、その音は「平均率」の音です。
平均率という調律の仕方は、ドからドまでのオクターブを均等に12等分していますので、音の響きとしてもとてもアバウトなものです。

そのような音を、瞬時に判別出来る様に訓練することで、弊害も出て来ます。
響きの全体のニュアンスを感じるよりも、判別する事を目的にすることで、「味わう」という微細な反応を損なう事になりかねません。
勿論全ての方がそうとは言えませんし、必ず例外はあります。

絶対音感をお持ちの方は、どの様に感じるのでしょうか。

1) 絶対音感が有る方がよく言われるのは、固定音名であれば読み易いが、相対音名で読むのは難しい。

2) 全ての音、例えば救急車の音やコップをはじく音など、普通に聞き流している音が「ド・レ・ミ・・・」で、聴こえる。

・・・全ての音が「ド・レ・ミ」で聴こえると、どのような内的感覚が発生するのでしょうか。
「味気ない!!」、と感じる方が非常に多いのも事実なのですが。

3) 「明確に、すべての音を判別出来る心地よさを感じる!!」

味気なく感じるのであれば、深い心の奥にどこか違和感を感じているのでしょう。

もし心地良いのであれば、判別出来るということに「ヨシ! ヤッター」と、達成感を感じているのかも知れませんね。

どちらにしても、絶対音感とは平均率の鍵盤を基準にした人工的な音の組み合わせを、反復訓練によって意識に組み込んでしまうのです。

つまり、「意識の空間感覚」にとっては、不自然なものを強引に組み込ませてしまう事にもなります。そして、不自然さを組み込まれた人の感覚は、組み込まれてしまった違和感に気付く事も無くなり、慣れていってしまうと・・・言う、とても残念な所なのです

絶対音感を付ける訓練の弊害は、「人」・・・つまり「生物」の持つ、自然の「全体感覚」から解離した束縛感覚を、いつの間にか持たせられてしまう、という所にあります。

生物としての全体感覚は、己を深く知りつつ、生命の法則に法った（のっとった）叡智の表現としての反応や行動や思考を導き出します。

この様な、私たち人間という生物の持つ、自然の精妙な全体感覚から切り離されてしまった人たちによって構成される社会を、持続させて行くための「社会性」とはどのようなものなのでしょう。か。

叡智から切り離されてしまっている、この現在の社会・世界は、どの方向に舵を切ろうとしているのでしょうか。

ただ一つ言えることは、意識の状態の硬直や「ぶれ」を、自らの存在感覚にメスを入れながら修正して行きつつ、自分の根源に向けての「学びの旅」を続けて行くことではないのかと思うのです。

意識の状態をここまでバグらせられている私たちが考える未来は、確実にぶれて行くということ、を、正確に把握しなくてはなりません。

現状の延長線上にある未来が良くなる様にと考える前に、<果たして私たちの方向を決める意識は正常か?>という問いかけを。

何が<正しい方向なのか>、を考える前に、私たちの意識をまず正常に、動きとしての「意識のエネルギー」と働きを、全く新しい視点から学んでいく事が、全ての変革行動の前にされるべき事ではないかと考えるのです。

「絶対音感」への考察でした。

